

「創作バレエで本格的な公演の舞台に立つのが目標」と語る、
けい古場での木戸亜樹恵さん



釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の横顔

□中□

親子二代の受賞に緊張

母、木戸公代さんも釧新郷土芸術受賞者（平成元年度）で、しかも同じ分野で初の親子二代の受賞となった。「釧路バレエ界の草分けである母はともかく、私の受賞には困惑しています」と、親子受賞の知らせに緊張気味。現役バレリーナとして、力量を発揮できる舞台を模索する一方、きみよバレエ研究所で、子供

親子二代の受賞に緊張

たちの指導にあたる毎日だ。バレエに打ち込む母のもと、極めて自然に踊り始めた。三歳で初舞台を踏み、「もっと踊りたい」と

来はバレリーナにと特別意識してきたのではなく、強制されたこともないけれど、踊ることが好きで、踊りたい、もっとうまくなりたいの一念で

「二人なら心強い」と一緒に研究生として入団。通信制高校に転入して学業も続けた。同バレエシアターは古典バレエが主体で、ゴールドバレエ群

達枝・河内昭和バレエスタジオ」に入所。有島武郎の「或る女」、近松の心中物などをもとにした創作バレエに取り組んだ。八七年、埼玉舞踊全国コンクールで埼玉新聞社賞を受賞。同スタジオ所属中にイタリアのバレエスクールに短期留学したり、佐多達枝リサイタル

ティバル（札幌）で「コッペリア」でソリスト、「パキータ」で主役を務めるなど毎年、活躍を続けている。バレエ以外でも書道師範の資格も持つ努力家だ。

より上手にの一念

純粹に踊り愛する指導

ただをこねたと聞かされていいます」と微笑む。「将

今日まで来たという感じ」とバレエとの関わりを振り返る。

舞）を勉強できた。在籍中に日本バレエ協会正会員となる。

に出演するなど、体験を広げた。「小さいバレエ団だったので、先生の指導も細やかで、コンクール出場などいろいろチャレンジできた」。

昨年結婚したばかりで、今一番の希望は「子供をもつこと」と語る。悩みは釧路はもとより道内でも、本格的なバレエ公演の舞台に立つ機会が少ないことで、現役ダンサーとしては、東京で佐多達枝さんの創作バレエの舞台に立つことを目標に、研さんを積みみたいとしている。一方、バレエ教師としては、「最初はテクニックにまず、気持ちがあった。このころは心を大切にしたいと思う。厳しいレッスンに耐え、踊ることを純粹に愛し、

バレエ

木戸亜樹恵さん（三二）

（釧路市富士見三の四）

創作バレエ、留学と幅広げる

親元を離れ、不安定な時期だったと話す十代を過ごした同団を八六年に退団し、日本人のバレエを求めて、日本の創作バレエの第一人者の「佐多

東京の「小林紀子バレエシアター」への入団者がいたことをきっかけに、

楽しめる子供を育てたい。後輩バレリーナ育成にも期待がかかる。

